◆ 武家の古都・鎌倉　市民の会連続シンポジウム㉑ ◆

「仏教から見る鎌倉と世界遺産登録」

平成23年10月2日(日)、鎌倉の世界遺産登録をめざす市民の会主催の連続シンポジウム第21回が鎌倉商工会議所ホールで開かれ、推進協議会も共催参加しました。冒頭に福澤健次市民の会事務局長が「世界遺産登録推進活動は鎌倉の歴史まちづくりに良い機会を与えてくれる。市民・行政は鎌倉の仏教寺院の『文化的価値』をもっと知る必要がある。鎌倉時代に起こったさまざまな仏教は今も共存していて、人々への接し方・境内境致なども多様で奥行きが深い」など、この日のシンポジウムの趣旨を説明しました。

◎鎌倉の仏教寺院の歴史と現在

パネルディスカッションは、高井正俊建長寺派宗務総長、仲田順昌覚園寺副住職、西岡芳文神奈川県立金沢文庫学芸課長とコーディネーターの内海恒雄推進協議会広報部会長という顔ぶれで行なわれました。

高井さんの「鎌倉は素晴らしい、既に世界遺産を超えている」、「覚園寺には、これが鎌倉という感じがある」、「金沢文庫は日本の歴史博物館の三指に入る」などの指摘から始まり、それに応えて仲田さんは「覚園寺は京都・泉涌寺の流れで、泉涌寺の月翁智鏡は留学したとき蘭渓道隆と知己を得た。蘭渓はその縁で来日し、後に建長寺開山となった。覚園寺は環境を守ることを心懸け、やぐらも守っている。武士の道徳観の中の神仏信仰や価値観にはお寺が寄与している、訪れる小中学生にオバマ大統領を思い、将来の首相も出る可能性を考え説明している。文化財を継続の中で次世代に伝えることを心がけている」と語りました。

西岡さんは「金沢文庫は文献資料を主に収蔵する県立博物館である。『吾妻鏡』の四角四境祭の記述に鎌倉の範囲は東が六浦、北は山ノ内とある。称名寺は真言律寺院で極楽寺の弟分、両寺が鎌倉の東西端を占めている。文庫収蔵品では称名寺に伝わった聖教(しょうぎょう)一万三千点が貴重で、鎌倉時代の修法等を教えてくれる。文庫所蔵の本は聖教と共に収蔵物の両輪であるが、相当数が外に流出し、宮内庁や諸大名家に収蔵され残りが今の金沢文庫にある。平安には顕密と言われたが、鎌倉密教とも言えるものが育ち、鎌倉時代中期以後は禅律の時代になった」などと話しました。

◎仏教寺院の文化財保存と公開・行事

高井さんは「頼朝の頃は真言宗だったが北条氏は比叡山の影響を受けない、宋で盛んだった禅を導入した。建長寺から日本の禅寺院が広まり、伽藍配置も建長寺が模範となった。建物整備に関しては徳川家の力が大きくお江の方の霊廟(みたまや)が建長寺に移された。保存管理計画で創建時に戻すという目標を立てた。華厳塔を建てたいので写経を始めた。本尊地蔵の修復では胎内から斎田地蔵が現れた。蘭渓道隆の生誕八百年を期して開山の骨容器の探索を始めた。仏殿・法堂に入り拝観できるようにした。半僧坊を銭洗弁財天のようにしたい」と話しました。

仲田さんは「お寺を守ることに力を注いできたが、建長寺の攻めの姿勢に元気付けられた」と語り、仏殿の薬師三尊や十二神将など仏像の話、開山などの宝篋印塔をパネルで説明し、塔の場所が海外専門家に感銘を与えたことを話しました。

次に西岡さんは「鎌倉の寺は徳川時代、保護されたとはいえ経済的に厳しく、江戸に出開帳などをした。明治の神仏分離、廃仏毀釈で危機を迎えたが、文化を守ってきたのは社寺だった」と語りました。

また古都保存法などに関し、高井さんが「意図は分かるが、運用で、寺の改修などの手続きに時間が取られ思うようにできない。外からの景観だけでなく内の事情にも理解がほしい」と訴え、仲田さんは「木を切ることも石を動かすのも駄目とされてきたが、少し手を入れた方が良かった」と述べました。

行事については、建長寺の釈迦・開山に関連する法要、四つ頭の茶会、外国人の座禅会、山門での法話、寺子屋・親と子の朗読会、覚園寺の黒地蔵や最近の景観を守りながらの諸行事、称名寺の薪能や金沢文庫の企画展などが紹介されました。

◎鎌倉と世界遺産登録について

西岡さんの「鎌倉がなかったら今の日本はない」、仲田さんの「政教分離を乗り越えるうまい工夫が要る」などの発言があり、内海さんが「世界遺産を契機に、世界に誇れる鎌倉仏教が生きる鎌倉のまちづくりを市民と行政が一体となって進めよう」と締めくくりました。